

## 校外学習

来週の金曜日は、校外学習でフィールドワークをすることになっている。天応の地域調べをしたあと、呉ポートピアパークに集合する。ここでは、二時間ほどの自由時間がある。みんな、その時間を楽しみにしていた。

翔太にしても、いつもの学校の準備なら朝になってあわててやってしまうこともあるが、この日のために前日から軟球とグローブをかばんに入れた。  
(よし、これで準備はばっちりだ。)

校外学習の日がやってきた。翔太の班は、フィールドワークでは、四十分かけて天狗城てんけんじょうに登った。ドンガメ岩から天応の町や瀬戸内海を見渡した。その景色を見て、改めて自分の住んでいる天応はいいところだなあとと思った。  
そして、安定寺あんじょうじの境内にある樹齢三百年の大銀杏いちじょうの木をまわり、呉ポートピアパークに着いた。

翔太たちは他の班より早く到着した。集合時間まであと二十分はある。  
(しめた。)

「健二、三角ベースの野球をして待ってようぜ。」

「ねえ、みんなでゆっくり公園を回って、弁当を食べる場所を探しておかない。」

「もうゴールに着いたんだから、それぞれ自由に時間を使えばいいじゃないか。」

結局、男子はみんな翔太の意見に賛成した。

「ちよつと、勝手なこと言わないでよ。」

「到着した班から、ここで待っておくように先生から言われているでしょう。」

美里や他の女子からも口々に注意されたが、

「今は自由時間みたいなもんだ。」

と、言葉を振り切って芝生に荷物を置いたまま、広場に駆けていった。

しかし、今日の呉ポートピアパークは、たくさんの人であふれていた。小学生や小さな子どもたちも遠足に来ていた。

「人が多いからやめないか。」

と、真吾は少し心配そうに言った。

「大丈夫、大丈夫、おれたち野球部なんだからゆっくり投げたらいいよ。」

翔太たちは、打球が飛びすぎないように、他の人に当たらないよう気を付けながら野球を楽しんでいた。

しかし、翔太たちは、しだいに熱中していった。同点に追い付かれそうになったとき、健二はホームベースに向かって思いっきりボールを投げた。



ドンガメ岩から見た瀬戸内海

「あつ。」

ポールはキャッチャーの真吾のグローブをかすめて、どこかへ飛んでいった。その後、聞こえてきたのは大きな泣き声。翔太たちは急いでその泣き声のする方へ走っていった。

見ると、泣きじゃくる女の子の周りには、おむすびやおかずが散らばっていた。どうやら、ポールは女の子のお弁当に当たったようだ。保育所の先生は、女の子をあやしている。

翔太たちは女の子に必死で謝った。それでも、女の子はいつこうに泣きやむ心配がない。

すっかり困り果てていたときに、同じ班の美里がかけ寄って来た。翔太はまた美里に叱られると思った。しかし、次の美里の行動は翔太の予想と違っていた。美里は女の子に自分の弁当を差し出した。

「大丈夫ですか。ポールはあたらなかったですか。ごめんなさい。」と、深々と頭を下げた。しばらく頭を下げたままだった。

(おい、何で美里が……。)

「もういいわよ。お弁当なら、私のものを分けるから大丈夫。気にしないで。」と、保育所の先生の優しい言葉が返り、頭を上げた。そして、美里は散らばった弁当を拾い始めた。翔太たちもあわてて拾った。一つ一つ拾い上げていくと、パンダのおむすび、カニの形をしたウインナー、ひよこの形をしていただろうと思われうずら卵など、いろんな形に作られていたものだった。何だか一つ一つのおかずにもにらまれているような気持ちになってきた。

「もう大丈夫、弁当に当たってびっくり返ったので、驚いたんだと思うわ。でも保育所の子どもたちにとって、遠足は特別な日なの。中学生なら、それくらいは理解してね。」もう一度、翔太たちは頭を下げてその場を去った。

集合場所に戻ると、みんな整列して座っていた。点呼が終わると昼食時間になった。海が見える場所を見付けて座った。美里から何か言われると思ったが、美里は何も言わなかった。本当はいつものように言われた方がすっきりしたはずだ。翔太は自分の弁当を広げたが、食べる気がしなかった。それよりも女の子のことが気になって、もう一度さっきの場所に行ってみた。しかし、もう保育所の園児は帰っていた。

(自由が不自由になるなんて……。)

自由時間になったが、翔太は何もする気持ちになれなくて、ずっと海を見つめていた。

